

第5回目（続）「サバ神社」の不思議・謎に迫る

（2023年8月30日放送）

今週は、前回に引き続き、「サバ神社」の不思議・謎に迫っていきたいと思います。

3. <社号の不思議>について

現存する12社は古くからの社号を含め、多くの社号が付されています。これらの内、漢字が意味を有するのは「馬サバ」の「左馬」だけといえます。意味から考えて義朝が「左馬頭」の役職にあったことからと推測されます。但し、この場合の読みは、「サマ」であり、「サバ」とはなりません。「サマ」から「サバ」となったのは、音通に由来すると見られます。西俣野の「サバ神社」では「馬サバ」・「波サバ」・「佐間」等音通で様々に表記されており、当時は音通が一般的になされていたことが窺えます。音通や仮借（かしや）により、多数の社号が生まれました。一方で合祀により「サバ」社号が消滅したと推測されます。江戸時代初期に創建されたと見られる「婆サバ」の「佐婆神社」や鍋屋にある「魚サバ」の「鯖神社」が江戸後期に刊行された相風記に掲載されていないのは、このような理由があるのではないかでしょうか。

祭神が義朝であることから、義朝が左馬頭であった「馬サバ」の社号が生まれたと言えます。また、満仲も左馬権頭でしたので、「馬サバ」に適います。左馬頭は源氏でも源義家が左馬頭であり、権頭を含めると多数が就任しています。日本の神々にはその生い立ちから「古事記」、「日本書紀」などの神話の世界の神々や、日本の歴史が進展する中で新たに祀られるようになった八幡神や稻荷神など、そして人を神として祀った人神信仰の3種類があります。主祭神を源義朝や満仲に設定しているのは、人神信仰によるものですが、相殿神や合祀により、多くの神が「サバ神社」にも祀られています。社号で特筆すべき中に「魚サバ」があります。何故、唐突感がある「魚サバ」が発生したのでしょうか。その点を解説します。「馬サバ」も「魚サバ」も当地の地名には由来していません。

ところで、「サバ」神社には民俗的な信仰行事が残っており、「七サバ参り」といわれていました。

疱瘡や疫病などが流行すると厄除けの為、年寄りが子供を背負って正月一日に七つの「サバ神社」を巡拝したとのことです。この行事はおそらく天保以降（1845）に盛んになりました、大正中期まで続いたと思われます。相風記では13社のうち、7社が「魚サバ」であり、元来は「七鯖参り」が正しい表記であったかも知れません。その後は、「馬サバ」も対象となり、自身の集落から出発して、いずれかの七社をめぐっても良いとの自由度を有するようになったと思われます。ここで、魚の鯖の意味を考えます。鯖には腐りやすい特徴がありますが、整腸作用や脚気に効くなどの薬効が江戸時代初期頃から一般に知られるようになります。しかし、この時期、鯖が手に入るには西国が中心で、塩漬けにして運ばれることが多く、越前の小浜（おばま）から京に運ばれる鯖街道が利用されました。東国では手に入りにくかったと想像されます。薬効がある鯖を求める願望や疫病除けの信仰が社号へつながったのかもしれません。

地域古来の13社の社号を推定してみると、主たる変遷の流れは、「沢の小祠」から「馬サバ」、そして「魚サバ」となり、「七鯖参り」の一時的なブームのあとは、一部は本来の名称に回帰したということではないでしょうか。

4. <社殿位置の不思議>について

現存する 12 社の社殿は境川・和泉川・引地川に沿った高台に南向きに 8 社、東向きに 3 社、西向きに 1 社面しています。境川・引地川に限定すると 9 社のうち 8 社が高台に南向きに立っているというのは、水害をもたらす恐れのある川を監視する見張り台の役割を集落単位で有していたためと推察されます。

いよいよ最後の謎です。

6. <「御靈神社」との関係性の不思議>について

「御靈」とは夭折(ようせつ)・事故死・戦死・自殺など不遇の死を遂げた人々の靈魂を言います。その靈魂は怨靈となって祟りをなし、災厄をもたらすとして恐れられました。その祟りを鎮めるためにその怨靈を宥め祀ったのが「御靈信仰」でした。祭神の義朝も非業の最期を遂げ、その怨靈が水害や疫病を引き起こすと恐れられ、信仰の対象になったと思われます。「御靈信仰」は桓武天皇が後に崇道(すどう)天皇と追号される早良(さわら)親王の靈を祀ったのが始まりで、菅原道真も一例です。鎌倉周辺では村岡地区にある宮前御靈神社が発祥の地で、天慶(てんぎょう)3(940)年平良文が甥の平将門を討つため、京都の「御靈神社」を勧請し、後に祭神として鎌倉權五郎景政・葛原(かずらわら)親王・高見王・高望王を加え五座となりました。県下に分社して 16 社があります。郷土史家川戸清氏は、非業の最期を遂げた源義朝の靈を鎮めるために祀られた「サバ神社」は、御靈神社が鎌倉郡内各地に勧請される過程で、郡境の境川・和泉川流域に出現した「御靈神社」の一種と見ることができるので、同じ地域には「サバ神社」と「御靈神社」が並存しないと自説を展開されています。かつて、義朝が侵攻した大庭御厨は鎌倉權五郎景政が開発し、伊勢神宮に寄進した土地でした。その義朝を祭神とする「サバ神社」は鎌倉權五郎景政を祭神とする「御靈神社」とは一線を画す付度が働いて、近世村単位での混在を避けたのかもしれません。

以上で 5 回にわたった「サバ神社の不思議」は終了させていただきます。おそらく、未だ検出・解明されない不思議・謎はあるかもしれません、それらは郷土史に関心を寄せる方々が今後も継続して調査されることを祈っております。